

学芸員 NEWS LETTER

2021.3

立命館大学 文学部

第33号



滋賀県米原市杉沢遺跡での小学生体験発掘

目次

■ 小学生の発掘体験	2
■ 博物館実習(館園実習)レポート	4
■ 学芸員課程報告	7
■ 山口大学埋蔵文化財資料館に勤務して(横山成己)	8

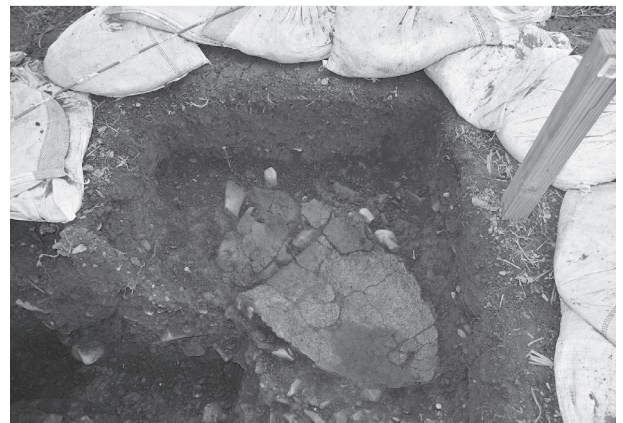
小学生の発掘体験

立命館大学文学部教授 矢野 健一

2020年9月9日と11日に、立命館大学文学部の「考古学実習Ⅲ」の授業で、小学生の発掘体験を実施しました。立命館大学では米原市教育委員会と協力して、滋賀県米原市杉沢に所在する杉沢遺跡の発掘調査を2011年から、地点を変えて継続しています。これまでに縄文時代晩期（約3000年前）の土器棺（土器を棺として利用して主に乳幼児を埋葬した墓）や木の実を貯えた貯蔵用の穴などが発掘されています。

今年はコロナ禍の中、発掘の実施が危ぶまれましたが、感染対策や発掘調査実施方法を地元自治会や教育委員会と相談し、参加人数や調査日数を縮小して実施することができました。発掘調査では13個目になる土器棺を発掘するなど、大きな成果をあげることができましたが、通常であれば実施している地元の方への現地説明会は残念ながら、今回は実施しませんでした。また、通常であれば合宿して自炊をしているのですが、今回は宿舍も個室にして分宿し、食事も個々にとるなど、異例の措置をとりました。

その中で、遺跡の近くにある米原市立春照（すいじょう）小学校から小学校5・6年生全員の体験発掘実施を打診されたのは、学生にとっても教員にとってもたいへん嬉しく、貴重な体験になりました。2011年に我々がこの遺跡の発掘を始めた年から、毎回、春照小学校の小学生を含む米原市内の小学生を対象に、希望者に発掘を体験してもらうイ



発掘調査で出土した縄文時代の土器棺



大学生の指導を受けて発掘する小学生

ペントを実施しています。通常は、8月に発掘するため、小学校は夏休みになりますが、今回はコロナの影響で発掘を9月に遅らせて実施したために、小学校の授業の一環としての体験発掘を実施することができました。体験発掘は小学校5年生と6年生に分けて、各日の午前中約1時間、実施しました。各学年およそ30人ずつを2班に分けて、1班15人程度のグループが学生の指導で遺跡を発掘している間に、別の1班を教員の私が引率して杉沢地区を周回して、発掘からわかった成果をふまえて、縄文時代から現代までのこの地区の歴史を話しました。

この杉沢遺跡は地面に遺物が散布しており、遺物を見つけるのは比較的簡単なので、体験発掘が容易にできます。地表面近くには各時代の遺物が混在しているので、指導する側は小学生自身が見つけた遺物を見て、縄文土器と須恵器の違いを説明できます。また、現代の茶碗のかけらやプラスチックの破片も同じように遺跡に埋もれていくことを実物を前にして説明できます。しかも、その遺跡は自分自身が住んでいる場所なので、有名な遺跡を発掘するよりもはるかに本質的な理解を得られるはずです。そういう意味で、このような体験発掘は大きな価値があると考えます。

アメリカでは小学校の先生自身が学校敷地内を発掘したいと希望し、その場所は遺跡として発掘する意義に乏しいと当局から反対されたにもかかわらず、非常に強い希望でやむなく発掘したところ、古いコーラの瓶など現代の「遺物」が発掘され、発掘に参加した地元の人たちは身近な歴史の発掘をたいへん喜んだという話を本で読んだことがあります。今回の小学生体験発掘でも、文化財や文化遺産の本質的な意義について、発掘に参加した学生も教員も改めて考える良いきっかけになりました。後日、参加した小学生全員から感想文をいただき、我々にとっても大変うれしく貴重な「体験発掘」となりました。この体験発掘の後、発掘に興味を持った小学生が数人、発掘を手伝ってくれたことも嬉しかったです。地元自治会や春照小学校の先生方にあらためて感謝する次第です。



遺跡近くの神社でこの土地の歴史を説明

北九州市自然史・歴史博物館での実習を通して

文学部 考古学・文化遺産専攻 中野未弥子

8月25日から8月29日の5日間、北九州市自然史・歴史博物館にて館園実習に参加した。今回は自然史に興味があったので、自然史課の学芸員が担当している実習に参加した。私が本来専攻しているのは考古学だったので、実習にしっかりついていけるか不安だったが、分からないことは優しく教えていただき、充実した実習になったと思う。

1日目には、館概要の説明や常設展とバックヤードの見学を行った。バックヤードの見学では、今回私は初めて標本等の収蔵庫を見学した。歴史系の収蔵庫に関しては、大学の講義で学んだことがあったが、温度や湿度の管理、害虫やカビの対策などの資料の保存、管理は共通するものがあった。

2日目には、甲殻類の横屋獣コレクションのリスト化と管理維持、化石標本整理を行った。甲殻類標本のラベルを確認し、そのラベルの情報をパソコンに入力する作業で、今回実習生が登録したのはコレクションのほんの一部だったが、コレクションの数は多く、これを基本的には学芸員一人で作業していかなければならないのだから、本当に大変だと思った。同じ種類でも標本をたくさん集めているが、これは、生物は個体ごとに形が変わるため、より精密な比較ができるからであると思った。また、博物館が所有する資料は、学芸員が収集するものの他に寄贈をしていただいたものも多く、収蔵庫に入りきらず廊下にまで置かなければならなくなっている。せっかく寄贈してもらった資料を安易に捨てることも他の博物館に移動させることもしにくく、資料は増え続ける一方である。そのような資料をどうすれば良いかが博物館が現在抱えている課題である。収蔵庫を新しく増やすのも予算が少ない博物館では難しいだろうし、私としては資料の優先度を決めて、優先度の低いものは他の博物館に移動させるのが良いと考えるが、難しい問題だと改めて考えさせられた。さらに、博物館は求められる役割が変化するもので、資料をただ集め研究するのではなく、地域の中で社会的な役割を持ち、来館者が楽しみながら学ぶことのできる博物館という役割に変化している。そして、現在はコロナの時代の新しい博物館像を考えていかなければならず、その中で博物館の役割は何だろうということも考えることがで

きた。

3日目には、鳥類の羽の標本作成とクジラの骨を並べる作業をした。私が標本を作製したのはコノハズクの羽で、鳥に触ることは初めてだったが、それぞれの羽の名称や翼の構造、羽の形を知ることができた。今回並べてみた骨は、コイワシクジラの骨で、全長5.8m、横幅2.2mもあった。骨にはそれぞれ番号が書いてあるのだが、それが薄れて見えなくなってしまったものがあったり左右どちらの骨か分かりにくいものがあったりして、並べるのは少し苦労した。こうした骨格標本を作るのは、解体したクジラの骨から肉や油を取り除くために地中に埋めたり煮沸したりするなどして長い時間がかかるため、大変な作業だと知った。また、今回私たちが並べたコイワシクジラの骨はいずれ展示するそうで、その日が楽しみである。

4日目には、石からアンモナイトの化石を取り出す作業とホワイトタイガーの骨を並べる作業をした。化石を取り出す作業では、化石を壊さないように、化石がどういう形なのかどこまで化石として保存されているのかに注意して行ったが、難しくて壊してしまい化石の一部しか取り出せなかった。今回取り出した化石は、ヨコヤマオセラス・イシカワイという種で、紀元前8000年の白亜紀後期のものである。日本中からアンモナイトの化石は出土するが、白亜紀の地層が分布しており保存状態も良いため特に北海道が多いと知った。また、ホワイトタイガーの骨を扱った際に、脊椎動物の大腿骨の上部は丸い形をしていることや哺乳類の首の骨は7つなど、骨の共通の特徴を知っていると、動物の骨の一部が見つかった場合でも何の骨であるか分かりやすくなったり骨格標本を作る時に骨の順番が分からなくなっても正しい位置が分かりやすくなったりすると知った。脊椎動物の骨について教えてくださった学芸員の方は恐竜の化石が専門だが、魚や鳥の化石でも扱うことがあり、その化石には、今生きているものの骨などの知識も必要になるそうだ。学芸員は自分の専門だけでなくそれ以上の知識を求められると学んだ。

5日目には、さく葉標本の作成と保管、岩石・鉱物の標本整理作業をした。植物の標本も毎日増え続けており、理想としては受け入れをしてから燻蒸、マウント・補修、登録、配架までをすぐに行うのが良いのだが、実際は燻蒸してからは仮保管を繰り返さなければ保管が追い付かない。やはり、それぞれの分野に対して担当が一人しかいないためこういう作業はどうしても時間がかかってしまうのだと感じた。また、博物館同士のネットワークの重要性も教わった。令和2年7月豪雨の際、熊本県のある博物館の一部が水没し、植物標本約3万点が泥水に浸かってしまった。そこでその標本を救うため、熊本県博物館ネットワークや西日本自然史博物館ネッ

トワークなどが助けを求め、北九州市自然史・歴史博物館も一部の標本を受け取ったという話を聞いた。博物館に何かあった際に、すぐに他の博物館に助けを求められるように、普段から博物館同士の連携やネットワークの維持をしなければならないと思った。岩石・鉱物の標本整理では、伊藤鶴喜コレクションの整理で約1100点の資料の確認をしたのでとても大変で時間がかかった。また、学芸員の仕事とは、標本の価値を高めることだと教わった。資料を破損や劣化から守って未来へつなげること、その資料を展示や普及で広めること、データベース化や分かりやすい分類での収蔵で標本を使いやすくすることで、標本の価値を高めることができる。

今回の実習を通して、学芸員の仕事は収集、保存、展示、調査・研究など多岐にわたるが、そのどれもが欠かせないものであると分かった。また、博物館がこれからどうすれば生き残っていけるかも考えることができた。自然史系について学ぶことは今まであまりなかったので、さらに興味が湧いてきて、これから機会があれば自然史系の知識も増やしていきたいと思う。

お 知 ら せ

・2020年4月採用

備前長船刀剣博物館

(文学研究科 行動文化情報学専攻 博士課程前期課程 考古学・文化遺産専修 在学中)

・2021年4月採用予定(2021年3月1日現在)

香川県教育委員会

(文学研究科 行動文化情報学専攻 博士課程前期課程 考古学・文化遺産専修 2021年3月修了予定)

大和郡山市

(文学研究科 行動文化情報学専攻 博士課程前期課程 考古学・文化遺産専修 2021年3月修了予定)

都城市教育委員会

(文学研究科 行動文化情報学専攻 博士課程前期課程 考古学・文化遺産専修 2021年3月修了予定)

本学学芸員課程修了の皆様

文化財関係業務への就職・転職・勤務・その他異動の際には、お手数をおかけしますが、奥付住所までご一報下さいますよう、よろしく願いいたします。

学芸員課程報告

2020年度博物館実習

大学指定実習館一覧 (11館・23名)			
地域	施設名	実習期間	人数
京都府	宇治市歴史資料館	10/20～10/23	2名
	亀岡市文化資料館	8/26～8/29、9/1、9/2	1名
	京都市考古資料館	8/25～8/29	2名
		9/8～9/12	
	京都大学総合博物館	8/31～9/4	1名
立命館大学国際平和ミュージアム	8/21、8/22、8/24、8/25、8/27、8/28	11名	
	1/12～1/14、1/18～1/20		
大阪府	大阪城天守閣	7/27～7/31	1名
	大阪市立美術館	9/28～9/30	1名
	大阪府立弥生文化博物館	8/8～8/10、8/12、8/13	1名
	堺市博物館	8/31～9/4	1名
滋賀県	大津市歴史博物館	8/18、8/19、9/10、9/11、10/24	1名
兵庫県	神戸市立博物館	8/25～8/29	1名

地方実習館一覧 (27館・28名)			
地域	施設名	実習期間	人数
秋田県	秋田市立千秋美術館	8/31～9/4	1名
山形県	上山城郷土資料館	10/5～10/9	1名
埼玉県	埼玉県立さきたま史跡の博物館	8/18～8/21、8/25～8/27	1名
東京都	東京大空襲・戦災資料センター	8/13～8/21	1名
石川県	石川県立歴史博物館	8/24～8/29	1名
長野県	茅野市尖石縄文考古館	9/1～9/6	1名
	伊那市立高遠町歴史博物館	8/4～8/8	1名
岐阜県	岐阜市歴史博物館	8/19～8/21	1名
	飛騨高山まちの博物館	7/31～8/4	1名
静岡県	浜松市博物館	8/3～8/8	1名
愛知県	豊川市桜ヶ丘ミュージアム	7/28～8/1	1名
滋賀県	彦根城博物館	8/17、8/18、8/21、8/24、8/25	1名
京都府	京都文化博物館	8/17～8/21	1名
	平等院ミュージアム鳳翔館	9/1～9/5	1名
大阪府	茨木市立川端康成文学館	7/13、7/15～7/18	1名
兵庫県	豊岡市立歴史博物館 但馬国府・国分寺館	8/24～8/28、8/31	1名
	神戸海洋博物館	8/16、8/19、8/21、8/26、8/29	1名
	城崎国際アートセンター	8/26～8/31	1名
岡山県	岡山県立記録資料館	8/18～8/22	1名
	岡山シティミュージアム	11/25～11/29	1名
広島県	呉市海事歴史科学館	8/19～8/21、8/23～8/25	1名
	広島県立歴史博物館	7/28～8/2	1名
香川県	高松市美術館	7/28～8/2	1名
	香川県立ミュージアム	9/8～9/12	1名
高知県	高知市立自由民権記念館	8/4～8/9	1名
福岡県	九州国立博物館	8/19～8/23	2名
	北九州市自然史・歴史博物館	8/25～8/29	1名

山口大学埋蔵文化財資料館に勤務して

横山 成己(助教)

本州最西端の山口県に所在する山口大学は、県内に主要5地区を構えていますがそのいずれもが周知の埋蔵文化財包蔵地内（山口市：吉田地区〔吉田遺跡〕・白石地区〔白石遺跡〕、宇部市：小串地区〔山口大学医学部構内遺跡〕・常盤地区〔山口大学工学部構内遺跡〕、光市：光地区〔御手洗遺跡・月待山遺跡〕）に立地しています。中でも吉田遺跡に対する調査歴は古く、昭和41年（1966）にさかのぼります。

この年、山口市や下関市に散在していた各学部の山口市吉田地区への統合移転が開始され、地中よりおびただしい量の土器や石器などが発見されました。これらの開発工事に対する埋蔵文化財保護の初期対応は、当時教育学部に在籍していた小野忠熙氏（故人：立命館大学卒）が学生の協力を得て行っていましたが、全てに対応できるはずもなく、翌昭和42年（1967）には学長を団長とする吉田遺跡調査団が結成され、本格的な発掘調査が開始されました。調査団は統合移転工事がひとまずの終了を迎える昭和48年（1973）まで継続的に調査を実施し、吉田遺跡に縄文時代晩期から江戸時代まで各時代の遺構や遺物が存在することを明らかにしました。

昭和52年（1977）には統合移転時の出土品や、小野忠熙氏が調査を担当した山口県内各遺跡の出土品を収蔵するため、埋蔵文化財資料館が竣工しました。その後、昭和54年（1979）に助手1名が配置され、以降現在まで継続的に構内遺跡に対する埋蔵文化財保護業務を実施しています。令和2年（2020）現在、当館には館長、副館長の下に助教2名、技術職員1名、技術補佐員1名が配置されていますが、発掘調査以外にも、当館に収蔵される考古資料を素材とした展示ばかりでなく、各学部に保管される様々な学術資料の公開活動も行っています。

吉田遺跡に関しては、発見当初は主として弥生時代から古墳時代の集落跡として著名でしたが、近年の発掘調査によりキャンパスの東～南東の丘陵地に古代官衙が存在していることが明らかとなりました。遺構としては、太い柱根を残す大型掘立柱建物や総柱建物群、柵列などが確認されており、遺物としては、墨書土器、円面

硯、銅製蛇尾未製品を含む铸造関連資料、鈐帯、木筒を含む多量の木製品などが発見されています。中でも、平成27年（2015）に出土した木筒は、全国で5例目となる音義木筒であったことから注目を集めました。音義木筒とは、書物の中から漢字・漢語を抜き出して、万葉仮名による和訓（読み方）を註書きした木筒のことです。この木筒に書かれていた文字の原典は、6世紀前半に成立した中国の初等教育の習字教科書「千字文」であることが判明しています。「千字文」とは、四字句の韻文が250句つらなる重複しない1千の漢字からなる書籍（教科書）で、中国ばかりでなく近隣諸国で用いられ、近世にはヨーロッパでも翻訳されました。日本では7世紀から千字文の習字木筒が見られますが、読み方を記した千字文木筒は初例で、原典の判明した音義木筒としても初例となりました。

と、かたち通りに館の紹介文を記しましたが、現在私は学芸員ではなく教員として大学に勤務しています。でも、大学生の頃に見つけた大切なもののために仕事を続けています。迫り来る老化にできるだけ気づかないふりをして、毎日土を掘り続けています。山口大学の学芸員課程履修学生にも常に語りかけていることですが、学芸員資格の取得云々は抜きにして、どうか短い学生時代の間大切にものを発見し、長い時間をかけてはぐくみ、かたちにするため努力してください。若い頃に思い描いた自分にはなれないものですが、若い頃の自分の想いは、今の自分を勇気づけてくれるはずです。



写真1 山口大学埋蔵文化財資料館外観



写真2 吉田遺跡発掘調査風景

1999年3月 立命館大学文学研究科史学専攻日本史学専修 修了